

---

 特集

 「福祉の哲学，価値，思想」について
 

---

 京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫
 

---

『人間福祉学研究』の今号は「『福祉の哲学，価値，思想』について」というタイトルで特集を組んだ。この雑誌も10年という節目を過ぎた。堅実な研究誌として今後も続けていくことができると切望している。常に学問や研究という言葉にもこだわっていきたい。

今年度のノーベル医学生理学賞を受賞したのは本庶氏であった。医学は確かにきわめて実利性の高い、人々の生活と直結する役立つ学問であり、臨床と深い関係性をもつ。しかしそれは一面、現実の場と関係のないような基礎的な研究の上に应用されていくものであり、実を結ぶまでには往々にして長い年月が必要とされる。出発点にこの研究が実用化される保障はない。現実の社会や現場において役立つか、という点からすればその保障もない。本庶氏が受賞されたとき、多くの研究者は今の学問への取り組みにおいて、短期間で結果を出さなければならない今日の学問行政と環境に警鐘を鳴らした。

それは理系の問題だけではない。文系においても数年前、社会に役立たないという基準でもって、哲学や文学、歴史への軽視が問題ともなった。社会に役立つということは何か、短期的視野からだけでなく、その視点はラジカル(根本的に)に問われなければならない課題ではないか。今回、こうした特集を組んだのもその一環である。特集を組むに当たって次のような「趣意」を執筆して

戴く皆様にお送りした。

21世紀も20年近くが過ぎようとしていますが、様々な課題が国内外に生起しています。現代社会を「危険社会」(ウルリヒ・ベック)と捉えるように、多様な危機が我々の身近に迫っています。世界的にみても、貧困、紛争、移民、核、自然災害、また身近な生活問題をみましても介護、育児、いじめ、自死、孤独、そして「格差社会」「無縁社会」「少子高齢社会」「人口問題」「AIと人間」等々、様々な課題が噴出しています。

関西学院大学人間福祉学部も設立から10年が経ち、人間福祉(学)という斬新な名称のもとでの船出でありました。それはキーワードして「社会福祉」「社会」「人間」等が想起され、とりわけ「福祉」という言葉には学部の普遍的な意味が含まれています。よく言われるように、「福」と「祉」という漢字はともに、「しあわせ」を意味しています。福祉とは、人々の「しあわせ」(幸福)を社会全体で考えていくということにつながります。

「しあわせ」ということは、抽象的で確かに主観的な意味もあり、個人差があり、その基準は一概に言えませんが、ただ、われわれが生まれ、生きていくとき、「いのち」を大切に、幸福に暮らしていくという当たり前

の権利があります。それは日本国憲法にある「幸福追求権」(13条)や「生存権」(25条)といってもいいかと思います。大学の使命が真理の探究という普遍的な理念の自覚も大切です。ますます、人間福祉の取り組むべき課題は重要となっているかと思われます。この研究誌もこうした課題に不断に取り組んでいく必要があります。

研究誌『人間福祉学』は毎号、特集を組んでおりますが、次号(11号)は「福祉の哲学、価値、思想」という特集を組むことに決定いたしました。現代社会は出口のないような課題に我々は直面しています。それへの解決策は必要です。もちろん解決のための技術やサービス、政策は大切であることは言うまでもありませんが、実学至上主義には陥穽がないとはいえません。今は、まさに学問の根底となる「福祉の哲学」「福祉の価値」、そして「福祉の思想」が根底的に問われ、かつ必要な時であるかと思われます。迫り来る課題に対して如何なる支援策、政策やサービスが必要なのか。その基底となるものを不断に確かめておくことが重要です。「人間福祉」の基

層となっているものは何かを、大学という空間において、様々な角度から考えていきたいと思っています。

人間福祉学はまだ新しい学問である。学問とは何か、「福祉」「社会」「人間」をキーワードとして、実体を伴った体系が必要とされる。人間福祉を考えることはいろいろな角度からアプローチしていく必要がある。そこには精緻な基礎的な研究もしっかりやっつけていかなければならない。それは現実との緊張関係も生み、試行錯誤も必要かもしれない。制度・政策と技術、そして他者への共感、生存への尊厳が大切であろう。

今回も6人の先生方から様々な角度から玉稿をいただいた。こういう積み重ねから人間の「福祉」を考えていければと思う。「人間福祉」というキーワードが過去の学問、人間の叡智を掘り起こしながら、21世紀にふさわしい学問体系となるように日々、努力していく必要があると思われる。人類(人間)にとって福祉が重要な価値、政治目標、規範、ひいては重要な学問となるよう日々の積み重ねが必要であろう。

玉稿を戴いた先生方にあらためて感謝申しあげる次第である。